

## ちいさなちいさな大冒険

奄美市立笠利中学校 二年 伊瀬知 美央

「いやだあ。いやだよ。」

そう言って泣くクロに、お母さんは「ごめんね。」と何度も小さな声で呟きました。

黒ウサギの男の子クロとお母さんは、しいの実村に住んでいるおばあちゃんに会いに行く予定でした。でもお母さんが風邪をひいてしまいました。風邪をうつすといけないのでクロはおばあちゃんのいるしいの実村まで一人で行かなければならなくなりました。クロは今まで一人で遠くへ行ったことがありません。クロは楽しみだった気持ちが三日目の風船のようにしぼんでいきました。

「ひとりでおくにいくなんてこわいよう。」

そう言ってクロはわあと泣き出しました。泣き声が家中に響き渡りました。

しばらくしてクロはお母さんの顔を見ました。お母さんは困った顔をしています。クロはお母さんの笑っている顔が好きです。クロは「ひとりでいけたよ。」って言ったらお母さん喜ぶかな、そう思いました。

「お母さん、ぼく、ひとりでおばあちゃんのいえにい

く。」

クロは勇気を出して言いました。お母さんの目が真ん丸に開きます。でもすぐに、

「じゃあ、お願いね。」

と言って、しいの実村までの地図とネリヤカナヤ共通のお金である貝殻としいの実パンの入ったバッグをクロに渡しました。クロは大急ぎで準備をして、

「行ってきまあす。」

と大きな声で言い、外へ飛び出しました。

「行ってらっしゃい。」

お母さんは、くしゃつと笑って言いました。

まっすぐまっすぐ。クロは地図を見ながらゆっくり歩きます。いつも歩いている道が知らない道のように見えて、クロはドキドキしてきました。クロはぼくぼくする心臓を抑えてすつと大きく空気を吸い込みました。

しばらく歩くと、ケンムンと書かれたアーチが見えてきました。ケンムン商店街です。にぎやかな街並みにクロはほつとしました。

商店街は買い物をする動物でごった返しています。クロは落とさないようバッグをぎゅつと握りしめ、道をよく見て歩き出しました。真ん中ぐらいいに来た時、

「クロちゃん。」

と聞きなれた声が入ってきました。クロはゆっくり

と振り向くと、

「イモおばちゃん。」

と笑顔で言いました。顔をしわくちやにしたイモリがクロの目にうつります。

「どこ行くの。」

おばあちゃんに聞かれたクロは、

「しいの実村のおばあちゃんちまで。」

と答えました。おばあちゃんは、

「あら、感心ね。」

と目をぱちぱちさせて言いました。クロは褒められたことが嬉しくて、えへんと胸を張りました。

商店街を通り過ぎて分かれ道が見えてきました。クロはもう一度地図を確認しました。次は左に曲がります。

左、左と小さな声で呟きながら歩いていると、

「クーローちやあん。」

と明るく元気な声が突然背中に響きました。クロはぴくっと肩を揺らしました。振り向くと深海のように青い羽根を持ったルリカケスが手をぶんぶんと振っています。

クロの友達ルリちゃんです。

「どこ行くの、おつかい。」

ルリちゃんはクロの周りをくるっと一周して言いました。

「うん。おばあちゃん家まで。」

クロがしいの実村の方向を指さして言うと、

「ひっひとりで。」

とルリちゃんはびっくりした声で言い、飛び跳ねました。こくりとクロがうなずくと、さらに大きく飛び跳ねました。

ルリちゃんと別れた後、クロはお母さんに暗い道を通るので、もだま列車を使うように言われたことを思い出しました。初めて電車に乗ることに気づき、クロの心の中は不安でいっぱいになりました。近くを通る列車の音に心が大きく跳ね上がります。クロは心の中で「大丈夫、きつと行ける。」と呟き、ペシッとほおを叩きました。心がじんわりと温かくなります。よしっとクロは思いました。

駅の中は旅をする動物や家に帰る動物で賑わっています。クロはちよいと背伸びをして、

「しいの実村行き一つ。」

とコノハズク駅長に大きな声で言いました。

「三百ネリヤです。」

駅長さんに言われ、クロは丁寧に貝殻を数えて駅長さんに差し出します。駅長さんは笑顔でクロに切符を渡しました。

いよいよ列車に乗り込む時間になりました。クロはバッグと切符をしっかりと握りしめ、しいの実村までの道

のりを調べました。四つ駅をこえるとしいの実村です。クロは列車に乗ると「あとちよつとだ。」と楽しみな気持ちでいっぱいになりました。ぶしゅうと音がしてドアが閉まります。クロはわくわくして、窓に張り付きました。駅から離れていくのを見て、クロの心はピョンピョン弾みました。

「ハブ村、ハブ村。」

気づくと四つ目の駅ハブ村まで来ています。周りを見るとクロ以外誰もいません。あと十分くらいかなと思っ  
ていると、たくさんのハブが乗り込んできました。帽子を被ったり眼鏡をかけたりにいます。クロは、いかにも獲物を食いちぎりそうな牙を見て泣きたくなりました。ぶしゅう、音を立ててドアがガシャンと閉まります。クロは「もう嫌だ。帰りたい。」と思い、小さく丸まりました。涙が出そうになるのが分かります。上を向き涙をこらえようとすると、

「おばあちゃあん、元気かな。」

と話す声が聞こえてきました。クロは声の聞こえた方を見ました。ハブの小さな子どもとお母さんが仲良く話しています。クロはハブのお母さんの幸せそうな顔を見てはっとしました。一人で会いに行き、お母さんやおばあちゃんを笑顔にするんだと改めて思ったからです。クロ

はもう少し、もう少しだからと自分を励ましピシッと前を向きました。窓には見慣れた懐かしい風景が広がっています。クロは嬉しい気持ちでいっぱいになりました。

「しいの実村、しいの実村。」

アナウンスを聞いて、クロはもうすぐ着くんだと嬉しくてたまらなくなりました。

駅を出た途端クロは駆け出しました。着いた途端早く会いたいという気持ち広がってきたからです。走っていくと茶色の屋根の家が見えてきました。おばあちゃんの家はすぐそこです。クロが茶色のドアをぐっと開けるとおばあちゃんが笑顔で立っていました。クロは嬉しくとおばあちゃんに抱きつきました。

